

詠 詠 句 誌

十 月 号



花鳥詠詠

10月号 (439号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠®

令和6年10月 ■ 第439号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	岩岡 中正 …… 2
	田丸 千種 …… 4
この人の作品	木村 佑 …… 7
卯浪	8
虚子研究 『六百五十句』 研究 (56)	9
筑紫磐井氏に聞く (2)	井上 泰至 …… 16
日本伝統俳句協会ミニシンポジウム	
芸としての俳句	21
カレンダーこぼれ話①	26
風報	28
地区行事開催日程表	31
編集後記	32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 虚子輯『さしゑ』より「つり」中村不折画

花鳥諷詠選集

岩岡中正選

特選五句

滝といふ人を無心にさせるもの

神戸 柏原 憲治

梅を干す星の雫にもう一と夜

石川 水橋 眞智子

一舟の水尾の涼しく遠ざかる

松山門 田 智子

田一枚一枚ごとの青田風

東京 篠崎 千春

封印のひとかたならぬ落し文

鹿児島 所 崎 玲子

二句短評

一句目——実感であり、誰でも納得できる句。滝の轟音の前の無音を描くパラドックス。滝の前でぐんぐん無心になって佇つ自分自身の姿を簡潔に詠んだ。無心の境地であつて、「といふ」が気にならない、力強い断定がある。

二句目——天地への愛のこもつた一句。花鳥諷詠とはこの句のように、大いなる造化に身を委ね、造化とひとつになつてこれを讃える「詩」である。梅も作者も一切が「星の雫」の愛によって生かされているのである。

入選六十句

さ走りて会話の端にゐる蜥蜴 鳥取 長安 節子

吊橋の起点終点雲の峰 泉天津 多田羅紀子

この頃のこの道が好き麦の秋 宮城 山家登志子

考への二転三転明易し 東京 児島 壽子

岩木山大きく見えて夏は来ぬ 弘前 藤田 豊子

あをあをと翳ふかぶかと大夏木 札幌 齊藤 和加

ホームステイ先へ扇子を土産とす 米原 成宮 伯水

整然といふ図書館の涼しさよ 金沢 篠島 安子

雲の峰あの子この子も反抗期 島原 三好 立夏

鮎を焼く声の大きい釣仲間 高知 沢田 佳代

夏帽の顎紐たるみ老農夫 高山 大下 雅子

銜して滝を大きくしてをりぬ 高崎 藤巻 淳子

棟梁の耳の鉛筆風薫る 高槻 林 曜子

転舵して青空回すヨットかな 神戸 上岡あきら

梅の実を一粒たりと無駄にせず 山口 椿 壽子

洞窟の無言の闇や沖繩忌 福岡 森田寿美子
 玄関の金魚に留守を任せたる 太宰府 持永真理子
 噴水の空を濡らして落ちにけり 東京 大和田博道
 山の湯の手桶ことりと夜の秋 福岡 今中 榮泉
 父の日やポパイのやうな力瘤 宇部 萬 洋子
 いつとなく遠のく生家露けしや 熊本 西 美愛子
 跡継ぎの唯ひたすらに草を刈る 江津 安田 心道
 思ひ出は少し脚色白日傘 福岡 棚瀬 弥生
 涼風の正面となる下り坂 岡山 伴 明子
 一水に色の旋律花菖蒲 大牟田 介弘 浩司
 吉報に大夕焼を仰ぐかな 周南 河村よし子
 白蓮のうしろに夕べ来たりけり 大分 小山さち子
 海峡を出ればフランス麦の秋 名張 奥田美代子
 白靴や晴れて眼下に湖ふたつ 加吉川 住田千代子
 ハンモック少し揺らして雲に乗る 神戸 小柴 智子

目を合はすことなく扇子動かしぬ 高松 宇和川 厚
 乾杯のグラス涼しく打ち鳴らす 糸島 宮脇 睦子
 万緑も練り込んでゐるパン屋かな 敦賀 為永香月枝
 手付かずの鎮守の森の木下闇 芦屋 鎌野 光子
 助勢あり一氣に終へし溝浚へ 浜田 文野 弘子
 夕星や田植済みたる村の黙 桐生 山崎 恵子
 元禄の風姿とどめて立葵 福岡 森 順子
 精いつばい今日生く母の汗の杖 伊賀 東構 東子
 地震の地の瓦礫にすくと立葵 横浜 秋吉美佐子
 青蔦やとんがり屋根のレストラン 生駒 南 純子
 黒々と山蟻光る社かな 八代 山下さと子
 クレヨン兄のお下がり花栢榴 国立 塚本 武州
 震災の瓦礫を叩く暴れ梅雨 日進 岩田 全充
 水昏れて代田の広さ残りけり 高松 真鍋 孝子
 麦わら帽阿弥陀被りの子が戻る 島根 佐々木ミチ子

● 田丸千種選

特選五句

とりどりの緑の風の連鎖して

羽生 樋口レイ子

見送つてゐたき背中を西日呑む

高松 郡としゑ

サングラス掛け颯爽とばあば来る

福岡野口 明子

自転車で逃げきれざりし夕立かな

綾瀬 鈴木 智香子

山の湯の手桶ことりと夜の秋

福岡 今中 榮泉

二句短評

一句目——若葉から青葉へ移る頃。木々を渡る風の様子
子を「連鎖」と表現されて面白い。動きが波のように
伝わっていく緑の枝や草々が見え、読者も心地よい風
に吹かれる。全体を「の」で繋げて、言葉も連鎖して
いるよう。

二句目——楽しい時間を過ごした一日も暮れかかり、
帰路につく客を見送りに出る。名残惜しいその姿を目
に留めたいのだが、強烈な西日が邪魔をする。ちよつ
とした喪失感に似た作者の感慨がしみじみとした余韻
として広がる。

冷蔵庫愛で満たして母帰る 佐賀 山田 香織
チヨコレート角の崩るる暑さかな 福山 久保 絃子
風景に要ありけり山滴る 高松 和泉 金子
長靴の中まで梅雨の湿りあり 小諸 丸山 ま美
雷鳴の近きにありて止まれり 福山 植岡 義道
木洩日の雫さみどり青葡萄 洲本 高野 さち
車椅子降り立ちくぐる茅の輪かな 宇佐 磯永喜八郎
五月晴シャツは海見て乾きけり 松山 門田 安世
ナイターに明け渡したる夜空かな 野洲 小泉 悦代
睡蓮の咲きつぐ湖の息吹かな 山口 辻岡 伸子
縄を投げて小樽の梅雨晴間 岡山 大野 文子
転車台錆びて久しや月見草 倉敷 中田 鈴江
かたつむり巍巍と城垣反りかへる 熊本 堀 伸子
焼酎に話題ころころ変はりゆく 東京 飯島 千青
初蟬に水の匂ひのありにけり 熊本 平山紀美子

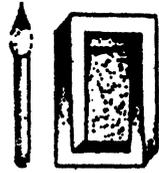
入選六十句

漱石を辿りゆく道花蜜柑 福岡 馬場 紀子
釣糸の絡みて引かれ花茨 静岡 劍持せつ子
もう一つ伸ばして札所打つ遅日 香川 福家 市子
岩木山大きく見えて夏は来ぬ 弘前 藤田 豊子
校長も気になると言ふ燕の巢 うきは 宮崎みゆき
玉葱を吊る白山の風当てて 白山 大橋美代子
夕暮の日の斑の揺るる青簾 金沢 保田 智枝
観覧車泰山木も花の頃 熊本 永村 典子
四阿に誰もをらざり蛇にあふ 日野 小川美津子
すぐ消えし一すぢだけの梅雨夕焼 熊本 井芹眞一郎
眼を細めらるる一献生身魂 高松 豊島 禮子
明易や問はず語りの老ふたり 福岡 三坂 一生
故里のこの夜涼こそいのちなが 鳥根 服部 康人
笈して滝を大きくしてをりぬ 高崎 藤巻 淳子
足裏の寛いでゐる夏座敷 宇部 永田 芳子

宿下駄をならして螢の客となり 江津 大前とも子
棟梁の耳の鉛筆風薫る 高槻林 曜子
緑蔭へどうぞと風の呼んでゐる 鳥取 椋 則子
梅の実を一粒たりと無駄にせず 山口 椿 壽子
藪蚊棲む門とも知らず雨宿 鳥根 猪俣 北洞
堰越ゆる高さに稚鮎ひかり跳ぶ 阿南 湯浅 芙美
洞窟の無言の闇や沖繩忌 福岡 森田寿美子
振花の振れを指で辿りもす 垂水 山元 通章
橋涼みただ遠き風見てをりぬ 高松 白根 純子
富士めざす六根清浄山開 下関 貞包 清子
少女等の会話とび飛びさくらんぼ あわら 木幡 嘉子
父の日やポパイのやうな力瘤 宇部 萬 洋子
脈打ちてくねる木の根や万緑裡 西宮 宮本 露子
鳴きさうな稲荷の石狐五月闇 太宰府 柴田慧美子
大川の河口見て来し船遊 徳島 吉田 有子

集合の島の空港夏帽子 鳥取 和田田鶴子
 曇天に朱は負けぬ色アマリリス 神戸 玉手のり子
 堰切つて炎流るる祭かな 和歌山 市ノ瀬翔子
 広げては畳む思ひ出更衣 福岡 山口 裕子
 羅を話なかばに羽織りけり 富津 三枝かずを
 明易やそれから眠くなることも 久留米 吉田いずみ
 思ひ出は少し脚色白日傘 福岡 棚瀬 弥生
 涼風の正面となる下り坂 岡山 伴 明子
 間に合はぬ電車見送り青田風 高松 大山 孝子
 片陰もなき道を来し無人駅 上越 板垣 柳子
 本題へ話を戻し古茶淹るる 太宰府 川路 泰子
 暮鳴きて沼の空氣の動きけり 四日市 伊藤 和子
 止みさうな雨咲きさうな月見草 堺 吉田 敦子
 出掛くるが恥づかしきまで日焼して 高知 片岡 幸枝
 足が出て手が出て真夜の夏蒲団 岡山 名木田純子

泥の香に仕上がつてゆく代田かな 鹿児島 柳橋かすみ
 撃たれてはすぐ生き返り水鉄砲 芦屋 田村惠津子
 風鈴鳴る一水の風集めては 川口 櫻井 松翠
 こころもち脚を弾ませねぶた笛 青森 七戸富美子
 樹も草も静かに暮るる梅雨夕焼 熊本 力 幸子
 かばかりの日除広ぐる人力車 高知 伊野部哲也
 日除して目高の水を守りけり 高知 川田 達子
 噴水の水玉となり立ち上がる さいたま 池澤はるを
 関取の鬢付け油冷房車 名古屋 住田 征夫
 螢火や四辺の闇の深まりぬ 東京 早坂 洋子
 仙菓の館をいただき暑氣払 柳川 廣松ヨシエ
 五月晴シャツは海見て乾きけり 松山 門田 安世
 焼酎に話題ころころ変はりゆく 東京 飯島 千青
 娘らの脚すんなりと盛夏かな 小樽 遠藤 嶺子
 草を刈る草の匂ひの分の草 春日部 吉川あかし



編 集 後 記

見事なる生椎茸に岩魚添へ

虚子

小諸疎開時代の句である。在から大きな取り立ての生椎茸と、新鮮な岩魚という山の幸をもらい、そこから興を得て、送り主の好意に謝した。何の手心も加えていないところが、贈答に絡んだ句の魅力である。流派によっては、こういう「軽み」を嫌う立場もある。しかし、俳句の魅力の一つに、「日記」や「手紙」と同じ日常の心の所在を共有する働きを認めるなら、即興は、今年大河ドラマでやっている、平安時代の和歌の応答から息づく「伝統」だ。

○先月十三・十四の両日、全国大会を盛会のうちに終えました。コロナで滞っていたご縁がようやく回復し、新たな展開を見せました。虚子晩年の作句に精彩をもたらした故地で、生誕一五〇周年にふさわしい会となりました。とりわけ北信越支部の方々、講演をしてくださった岸本尚毅さんに御礼申し上げます。

○岸本さんのご講演を聞けなかった方々には、オンラインで配信する予定です。

○その岸本さんも新たに選考委員に加わられた第三回汀子賞、並びに先月からご案内している協会賞の応募が始まっております。今年の総会・授賞式では、両賞の授賞式が総合誌でも大きく取り上げられ、協会の一歩の目的である作品の発信が充実した形でなされ、以前にも増して作家として脚光を浴びた方も複数いらっしゃいました。

今回も奮ってのご応募をお待ちしております。

○今月より郵便料金が変わります。「花鳥諷詠」の追加購入、俳句手帳の送料も変更しますが、詳細については後日お知らせします。

(井上泰至)

花鳥諷詠十月号(通巻第四三九号)

定価一、二〇〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和六年十月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電 話 〇三三四五五五一九一

F A X 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一一九二二